

松下幸之助記念志財団 研究助成  
研究報告

(MS Word)

【氏名】 楊 妍

【所属】(助成決定時)  
東北大学国際文化研究科【研究題目】  
1930 年代外地における日中人的交流の考察

## 【研究の目的】(400字程度)

本研究は、まず、民国期の中国において留学中の日本人学生に注目し、現地で多種多様に行われた中国人との交流を把握する。例えば、倉石武四郎の留学日記を通して当時の日本人留学生が如何なる経緯で戦後中国学界の本流を形成するに至ったのか。それを現地にいった中国人が担った学術的協力面から分析し、近代日中文化交流史という視点から、その意義付けを明確化したい。また、目加田誠など当時の多く日本人留学生の引受先である東方文化事業北平人文科学研究所は、現在でもいかなる機関であったのか不明確である。しかし、これらの留学生が残された日記などの資料の中で研究所に関する記述が多く残されており、従来存在が忘れ去られていた外地交流団体の実態解明を試みたい。最後、倉石武四郎の中国留学を通してその中国語教育と理解に与えられた影響について、昭和 14 年(1934 年)に弘文堂書房によって発行された『倉石中等支那語』からどのように反映されたのかについて考察したい。

## 【研究の内容・方法】(800字程度)

- (1) 倉石武四郎は京都帝国大学、東京帝国大学の教授で、古典文献学、清朝小学の研究者であるが、その一方で中国語の教育活動にも力を入れ、1930 年代末から積極的に中国語の教科書を編纂し、1950 年代からは民間の中国語講習会を主宰し、退官後は中国語辞典の編集にあたったことで知られている。倉石は 1922 年、当時の日本漢学の中心であった京都帝国大学に入学し、狩野直喜、内藤湖南のような著名な漢学者の指導のもと、研究に従事し、1927 年に助教教授に昇任した。1928 年 3 月 23 日、彼は日本の文部省によって海外研究員として北京留学に命じられ、1930 年 8 月 5 日に帰国した。彼の留学は学問を学ぶを目的としたため、当時に執筆した日記の内容は「述学」を中心となったものになった。
- (2) 1927 年 12 月に「東方文化事業総委員会」が「北京人文科学研究所」を設立し、漢学を中心に研究事業を展開した。倉石武四郎の『述学齋日記』に記録された書籍の購買が殆ど清末の典籍で、756 部にも達していたこれらの書籍は京都研究所に送られ、現在「倉石文庫」の一部として保存されている。そのため、「北京人文科学研究所」では、一体何の研究をしてきたかという疑問を持って倉石の残した著書を資料として考察した。
- (3) 明治維新以降、日本は中国より早く近代化の道を突き進んだ。中国の政治・文化・経済は遅れており、学ぶべきことは何もないという偏見が生じ、それは日清戦争後にさらに強まり、中国進出を正当化したい国策とも絡まって、中国蔑視へと繋がったのである。だが、当時の日本民間では中国語学習熱が高まっていった。当時の中国語教育は、実用会話の習得することを目標

にしていたため、教師の発音を学生が暗記・暗唱するという教授法が採用された。文法書もなく、「中国語には文法がない」などと言われていた。倉石はこの方法で中国語を学ぶことに疑問を抱くに至る。彼はその後北京での在外研究期間にこの考えを更に強め、試行錯誤を重ねながら新しい中国語教育法を実践していったのである。

**【結論・考察】（４００字程度）**

- (1)「述学」とは講義を聞いて学問を学ぶということである。文部省は研究者を北京へ派遣させるということが、主に戦後、日本の学界における西洋の学問的な傾向の蔓延への反省を反映していた。倉石の日記の中で、彼の独自の感覚で当時中国の学術、社会を感じ取っており、民国期の中国と日本の知識人間の交流活動を明確に反映していた。
- (2)「北京人文科学研究所」に関する調査を通じて、20世紀前半日本の「対支文化事業」の始末を概要的に考察した。当事業を巡る日本の態度、中国政府、知識人の反対から、「対支文化事業」は20世紀前半、殊に1920年代～40年代の日中間の教育、文化摩擦の軌跡を生き生きしく描いていることが分かった。
- (3)倉石の中国語教育に関する著書は『支那語教育の理論と実践』（1941）と『中国語五十年』（1973）などがある。前者は1941年以前の中国語教育を批判し、中国語の教授法の改革を説いたもので、後者は50年にわたる自らの中国語学習と中国語教育活動の歴史を書いたものである。これらのテキストの作成を通して、中国語を学ぶ始める環境整備に着手することにした一方、内容は分かりやすく日本人の学習効果を高めるように様々な工夫を凝らした。